

令和 2 年 7 月 5 日現在

機関番号：32205

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04374

研究課題名(和文) ロール・プレイを用いたカウンセリングコンピテンス教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a counseling competence education program using role play

研究代表者

田所 撰寿 (Tadokoro, Katsuyoshi)

作新学院大学・人間文化学部・教授

研究者番号：80616300

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：公認心理師法が制定された現在、カウンセラー養成において理論や知識の教育だけでなく、臨床実践におけるカウンセリングコンピテンス(態度・姿勢、技術、能力)の教育が喫緊の課題となっている。

本研究の重要なテーマは、ゲートキーピングである。これは、カウンセリング学習者の資質と能力を評価し、必要な改善策を提供するシステムである。日本においてゲートキーピングシステムを導入するために、カウンセリングコンピテンスの概念を明確にし、カウンセラーのアイデンティティを再定義し、カウンセラーの教育内容を検討を行った。これらの調査に基づき、最終的に日本におけるゲートキーピングに関する調査を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今後のカウンセラー教育において、以下の3点について学術的意義および社会的意義が得られた。第一にカウンセラー教育の内容についてである。さまざまなカウンセリングコンピテンスを教育することが現代の主流となっているが、その中でも中核となるコンピテンスについて同定した。第二に、ロール・プレイといった実習や演習による学びをどのように進めるのか、学びのプロセスを俯瞰して捉えながら進めることの必要性が求められた。第三に教育者と学生が話し合いながら教育を進め、効果的なカウンセラーを養成するためにはゲートキーピングの明確なシステムが必要であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The presence that the Certified Psychologist Law in Japan has been established, not only theory and knowledge education in counselor education but also counseling competence “attitude, skill, and competence” in clinical practice is an urgent issue.

An important theme in this research is gatekeeping, which is a system that evaluates the qualities and competencies of counseling learners and provides necessary remediation. To implement the gatekeeping system in Japan, we clarified the concept of competency, redefined the counselor identity, and examined the counselor education contents. Based on these studies, we finally conducted a survey on gatekeeping in Japan.

研究分野：カウンセラー教育学

キーワード：カウンセラー教育 ゲートキーピング ロール・プレイ カウンセリングコンピテンス ループリック評価 アイデンティティ 教育プログラム 学びのプロセス

1. 研究開始当初の背景

カウンセラー養成における専門性の獲得のために必要な3つの要素として、「知識及び理論の“学習”」、「臨床現場を想定したロール・プレイを中心とした“訓練”」、「実際の臨床実践をスーパービジョンを受けながら行う“経験”」がある。“学習”と“訓練”の土台の上でスーパーバイザーの指導を受けながら臨床“経験”を積み重ねていくことがカウンセラー養成の一般的なプロセスであろう。特に“学習”と“経験”は大学・大学院における教育で行われている内容である。カウンセラー養成の先進国であるアメリカでは、「カウンセリングと関連する教育プログラム」(Council for Accreditation of Counseling and Related Educational Programs, CACREP)においてかなり詳細にトレーニング内容が規定されており、特に訓練面においては日本の(財)日本臨床心理士資格認定協会のカリキュラムと比較すると、より詳細かつ膨大な時間数による内容が課せられている。現在日本の学部レベルでの“訓練”はカウンセリング実習(30時間)といった授業が設定されているが、シラバスを見てみると、実践的な内容はそのうち最大10時間程度に限られている。さらに大学院においては通年を通して臨床実習の授業が設定されているが、これは“訓練”ではなく実際の相談者に対して指導者がスーパービジョンを行うという“経験”に対する教育である。つまり日本のカウンセラー養成課程において圧倒的に“訓練”の時間が少なく、その内容も不十分な状況にある。一方“訓練”に対して十分な時間をとっている教育機関としては、民間の教育機関が挙げられる。例えば上智大学カウンセリング研究所や栃木県カウンセリング協会におけるカウンセラー養成課程のカリキュラムでは、日本カウンセリング学会認定カウンセラー養成カリキュラムに準拠し、120時間の“訓練”の時間が設定されており、内容としてもロール・プレイをはじめ、マイクロ・ラボラトリー・トレーニングや構成的グループエンカウンターなど宿泊訓練も含めたカリキュラムとなっている。

公認心理師法が成立し、その教育内容が2017年に公に示された。この資格は日本では初めての心理職の国家資格であり、教育内容の妥当性やエビデンスは今後積み上げられていくことになる。カウンセラー養成の先進国である米国では、アメリカカウンセリング学会(ACA)やカウンセリングおよび関連する教育プログラム認定協議会(CACREP)等の全国組織が中心となり、教育内容の妥当性を定期的に検証している。こうした検証作業を積み上げることにより、現代社会の要請に応えられる質を担保した専門家を育成している。日本においても米国の評価システムを参考にしながら、日本独自の風土に合った教育成果の評価方法を確認し、エビデンスを積み上げ、社会のニーズに応えることができる評価システムを開発することが求められる(田所・小川, 2018)。心理専門職の教育には、容易に測定することが難しい能力や資質を含めて評価する方法が必要となる。すなわち心理専門職としてのコンピテンシーを、筆記試験や実技試験をはじめとしたさまざまな方法で、さまざまな評価者により、さまざまな次元で評価することが求められる。このように、心理専門職の教育成果の評価に対し、多くの努力と緻密なエビデンスが必要とされる背景には、援助専門職の倫理の問題がある(田所・小川, 2018)。すなわち“決してクライアントを傷つけてはならない”とい

う基本原理である。ACA の倫理綱領ではこの基本原理に基づき、教員に対して、専門職としての能力に問題がある学生(Problems Professional Competency: PPC)に対して、ゲートキーパー（専門家への登竜門における門番）としての役割を果たすように求めている。

2．本研究の目的

効果的なカウンセラーを教育するために重要となる概念が何であるのか。またこれらの内容を効果的に教育していくためにはどのような方法が考えられるのかについて、広く文献研究を行い、その中心となる概念についてまとめる。またロール・プレイを中心とした日本におけるカウンセラー教育の実態を明らかにすると同時に今後の教育手法を検討することも必要となる。さらには従来まではなかなか扱われることがなかったカウンセラー教育者が、学生であるカウンセラー候補生をどのように評価しているのか。能力が十分であるのか、再教育すべき内容があるのか、専門家を目指すことをあきらめさせるのかについて実態調査を行う。これらによって学び始めたものがカウンセリングの専門家になることが前提ではなく、それ以前に専門家になるべきか否かを教育者と学生が相互に話し合いながら考えていくシステムが構築することができる。

3．研究の方法

本研究では研究の方法として、4つの方法を用いた。第一に文献研究である。文献研究に関しては欧米の文献を中心に広く文献をあつめ、カウンセラー教育の内容および手法についての分析を行った。第二に web シラバスを用いた、ロールプレイに関する日本の大学の教育内容の調査である。これに関しては臨床心理士の養成を行っている大学を対象に学部の授業についての分析を行った。第三に、カウンセラー教育者を対象とした質問紙調査である。最後にカウンセラー教育のルーブリック評価に関しては、対象者自身にその体験について振り返ってもらい文章にまとめたものを用いた。

4．研究の成果

(1) 初学者へのカウンセラー教育に関する研究の展望

本研究では、初学者に対するカウンセラー教育内容について欧米諸国の研究を概観し、日本における実証的研究 (evidence-based research) に向けて考察することを目的とした。カウンセラー教育の研究として、専門教育の準備、トレーニング手法、トレーニングの内容とその成果の3つに分類し、それぞれの研究知見をまとめた。「専門教育の準備」としては、大学生へのカウンセラー教育の意義と内容およびゲートキーピングについての検討を行った。「トレーニング手法」としては、ロールプレイ、グループ体験、個人カウンセリング、臨床実習とスーパービジョンのそれぞれの効果について先行研究を比較検討した。「トレーニングの内容とその成果」については、従来のカウンセリングスキル基礎訓練を取り上げた。また、トレーニングを受けることによる変化として、人間的成長および専

専門家としての成長，自己の変化，認知の変化を取り上げた。これらのカウンセラー教育の内容を日本において活用していく方法について考察を行った。

(2) 日本の大学におけるカウンセラートレーニングの演習内容に関する調査研究

本研究の目的は，日本の大学において，ロールプレイ(RP)がカウンセラー教育でどのような活用のされ方をしているのかを調査し，今後のカウンセラー教育プログラムを考える上での示唆を得ることである。155校の授業シラバスを対象とした調査を行った。調査内容としては，「講義名」，「担当者の所属」，「担当者の専門」，「授業回数」，「受講可能学年」，「RPの内容が授業内容に記名されている授業回数」，「RPの内容を中心とした授業内容」であった。結果として，大学生に対するカウンセラー教育の，日本の大学における現状が明らかとなり，今後の教育プログラムの充実に向け大きな示唆を得ることができた。

(3) 日本におけるゲートキーピング実践の検討

日本におけるゲートキーピングの研究は，ほとんど行われていない。心理職として初めての国家資格である「公認心理師法」が施行された。今後さらに社会的に認知され，国家資格を持つ心理職としての責任と役割は大きくなっていくことが予想される。それに伴って日本においても，ゲートキーピングの役割が求められるのは必至である。ゲートキーパーであるカウンセラー教育者は，クライアントを傷つける可能性のあるカウンセラー候補生に対して確固たる評価を行なわなければならない。そして，専門家としての行動・価値観・倫理観・カウンセリング能力が不十分または欠損しているとは判断されるときは，その者たちを専門家とさせない役割があることを明確に認識し，これを遂行していかななければならない。そこで本研究の目的は，次の4つを明らかにした。アメリカカウンセリング学会(American Counseling Association: ACA)の倫理綱領を基に，ゲートキーパーとしてのカウンセラー教育者の役割と責任を定義する，カウンセラーとしての資質(disposition)についての研究を概観し，ゲートキーピングにおける評価方法(入学時および入学後)，についての具体的な取り組みを概観する，アメリカにおけるゲートキーピングの実際として，New Jersey City Universityにおける入学試験の取り組みを紹介する，上記の知見を踏まえて，日本におけるゲートキーピングの取り組みを提案した。

(4) 日本における心理専門職養成に対するゲートキーピングの検討

本研究では，日本において「専門能力に問題がある」と教員が判断する大学院生がどの程度在籍し，またそれらの学生に対してどのように対応しているのかを明らかにすることを目的とした。対象は，公認心理師の養成カリキュラムに対応する大学院の教員，63名(男性39名・女性24名)であった。調査の結果，専門的能力に問題のある学生の割合：「専門的能力の問題」の学生の割合を尋ねたところ，61名からの有効回答が得られ，平均13.2%(SD=15.3)であった。回答の幅が0%～100%までと広く，標準偏差も15.3と大きいところから各教員により見解が分かれていると考えられる。回答の幅が大きい点からは，専門的能力に問題があるという基準について，教育者間での概念が一致していないことが想定される。まずはゲートキーピングについての概念の普及が必要である。問題があると判断した

理由：専門的能力に問題がある学生と判断した理由について回答を求めたところ（複数回答あり）、「情緒的安定性」46（73.0%）、「人間関係スキル」および「パーソナリティの問題」35（55.6%）、「精神疾患」26（41.3%）、「資質」および「自己理解」25（39.7%）、「学力」22（34.9%）、「倫理観」18（28.6%）、「多様性への感受性」12（19.0%）、「臨床スキル」11（17.5%）、「その他」1（1.6%）であった。器質的な疾患を除き、情緒的安定性や人間関係スキルなどは心理専門職を目指すうえでは共通して重要な要因であると教員が判断していることが明らかとなった。問題があると判断した学生への対応：学生への対応については（複数回答あり）、「教員の会議で対応を協議した」52（82.5%）、「個別に当該学生に話をして、改善を促した」42（66.7%）、「問題に関する個別の課題を課した」22（34.9%）、「実習に参加させなかった」18（28.6%）、「特に対応していない」8（12.7%）、「その他」6（9.5%）であった。決まった手続きがあるわけではなく、各事例に応じて教員同士が協力しながら対応している実態が明らかになった。

（5）臨床心理学専攻の大学院生に対するルーブリック評価の試み

本研究の目的は、ルーブリックを用いてカウンセラー研修生である大学院生を評価することの効果を検討することである。そこで以下の2つのリサーチクエストionsを立てた。

【リサーチクエストion 1】大学院生はルーブリック評価をどのように実際の大学院生活の中で応用するか。【リサーチクエストion 2】教員と大学院生の双方にとって、ルーブリック評価を使用することのメリットとデメリットは何か。

質的検討の結果、【リサーチクエストion 1】：「アセスメント面接」では大学院生自身の資質について焦点を当てているため、自己を振り返るまたは見つめ直す機会というものが多くなる傾向が見られた。「教員から具体的な評価を受けられる点が有意義であった」、「ルーブリック評価の指針の行き届いた環境は、安心と信頼を感じ、学習意欲に繋ると感じた」と振り返っている点は非常に興味深い。実習を含めた大学院生活について、教員と大学院生が定期的に資質の指標を用いながら具体的に話し合う場を持つということは、明確な教育方針を示すことができ、大学院生と教員に安心感を与える機会となり得る。

【リサーチクエストion 2】：計画的に期間を定め、大学院生について話し合う機会を持つこと自体が有意義であることは間違いない。この話し合いの機会を有意義なものとするために最も重要で必要最低限の条件となるのは、教員と大学院生との信頼関係であり、“よりよいカウンセラーになるために”という共通の目標の下で行われなければならない。この「アセスメント面接」の目標が共通理解されている場合、メリットは非常に大きい。反対にこれが一致していない場合、話し合いの場は、相手の欠点を指摘する場となり、教員に対する不信感を募らせる場となってしまう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 田所撰寿・田久保暁理・高野正美	4. 巻 12
2. 論文標題 臨床心理学専攻の大学院生に対するルーブリック評価の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作新学院大学臨床心理センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田所撰寿	4. 巻 9
2. 論文標題 学部学生に対するカウンセラートレーニングに関する授業内容 ロールプレイを中心としたシラバスの分析から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作大論集	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.18925/00001122	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田所撰寿	4. 巻 7
2. 論文標題 学部学生に対するロールプレイを用いたカウンセリング演習の効果：授業感想カードによる学びのプロセスの検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教職実践センター研究紀要（作新学院大学）	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田所撰寿	4. 巻 11
2. 論文標題 臨床実践に求められるカウンセラー教育内容の検討 倫理的意思決定・グループケア・セルフケア	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作新学院大学大学院心理学研究科臨床心理センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田所撰寿	4. 巻 51
2. 論文標題 初学者へのカウンセラー教育に関する研究の展望：日本における実証的研究に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 カウンセリング研究	6. 最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.11544/cou.51.1_51	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田所撰寿	4. 巻 8
2. 論文標題 専門職であるカウンセラーとしてのアイデンティティの構築：カウンセリングの歴史と定義の変遷	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作大論集	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.18925/00000952	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田所撰寿・小川裕美子	4. 巻 6
2. 論文標題 日本におけるゲートキーピング実践の検討：カウンセラー教育者の役割と責任、そして倫理	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教職実践センター研究紀要 (作新学院大学)	6. 最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 田所撰寿	4. 巻 7
2. 論文標題 カウンセリングの質を高めるカウンセラー教育プログラム " カウンセリングコンピテンス " の概念を 考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 作大論集	6. 最初と最後の頁 67-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.18925/00000602	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田所撰寿	4. 巻 4
2. 論文標題 カウンセラー教育におけるゲートキーピングの意義	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部 教職実践センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田所撰寿
2. 発表標題 日本における心理専門職養成に対するゲートキーピングの検討
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉澤雅子・大出勇・後藤祥子・大吉智子・田所撰寿・橋本幸晴
2. 発表標題 カウンセラー教育におけるグループ体験学習の効果に関する研究 その2 MLTでの発言の「話の内容の深さ」分析
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大吉智子・大出勇・後藤祥子・吉澤雅子・田所撰寿・橋本幸晴
2. 発表標題 カウンセラー教育におけるグループ体験学習の効果に関する研究 その3 MLTでの発言の「関与対象」分析
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田所撰寿
2. 発表標題 学部学生に対するロールプレイを用いたカウンセリング演習の効果 授業感想カードを用いた質的検討
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大吉智子・田所撰寿・橋本幸晴
2. 発表標題 カウンセラー教育におけるグループ体験学習の効果に関する研究 マイクロ・ラボラトリー・トレーニング (MLT) 参加者の感想文の質的分析
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高野正美・田所撰寿・高野氣和加
2. 発表標題 カウンセラー初学者に対するロールプレイ演習の効果 ロールプレイ研修の縦断的研究による心理面の質的变化
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田所撰寿・高野正美
2. 発表標題 カウンセリングスキルに対する自己評価と他者評価の差異：3泊4日の研修による変化の推移から
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第50回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高野正美・田所撰寿
2. 発表標題 カウンセラー訓練生に対するロールプレイ演習の効果：4日間のロールプレイ研修での心的・技術的变化
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第50回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田所撰寿・高木憲子・日野千宜・松本浩二
2. 発表標題 カウンセラー教育のこれまで、そしてこれから
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第50回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菊池真巳・菊池平莉・田所撰寿・日野宜之
2. 発表標題 学童保育指導員の支援に関する研究：エゴグラムを用いた指導員への支援活動を通して
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第50回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田所撰寿・高野正美・松本浩二
2. 発表標題 カウンセラートレーニングプログラムの評価に関する研究 1年間のトレーニングによる変化
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第49回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高野正美・田所損寿・松本浩二
2. 発表標題 カウンセラートレーニングプログラムの評価に関する研究 1年、2年、3年間のトレーニングによる変化
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第49回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田所損寿・高木憲子・本城慎二・松本浩二・日野千宜
2. 発表標題 カウンセリングの質を高めるカウンセラー教育プログラム “カウンセリングコンピテンス” の概念を考える
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第49回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高野氣和加・田所損寿
2. 発表標題 カウンセラー養成におけるトレーニングプロセスに関する研究 自験例によるカウンセリングのイメージ及びスキル獲得の変化に焦点を当てて
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第49回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小川 裕美子 (OGAWA Yumiko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松本 浩二 (MATSUMOTO Koji)		
研究協力者	高野 氣和加 (TAKANO Kiwaka)		
研究協力者	高野 正美 (TAKANO Masami)		